

2012年5月1日

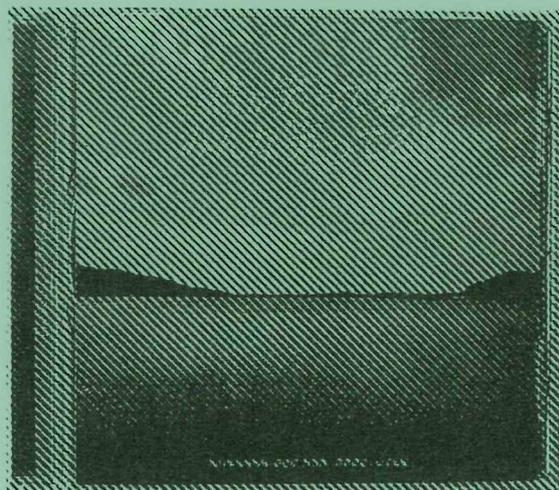
Vol.81

みみん



【題字】谷川俊太郎さん

MY FAVORITE お気に入り小物拝見



理事対談ゲスト、ソーシャルウィンドウ株式会社代表取締役社長、鷹野秀征さん。お気に入り小物は、ジャズシンガーの奥土井美可さんが歌う復興支援ソング「君が笑ってる、みんな笑ってるー」です。震災前の牡鹿半島の美しい風景をイメージして作られたこの曲に、牡鹿半島を訪れたことがある鷹野さんは思い入れも強く、娘さんと一緒に車の中で聴く定番ソングになっているそうです。

■目次

- P1 目次
- P2~3 理事鼎談
(代表理事 大滝精一、紅邑晶子×
ソーシャルウィンドウ株式会社 代表取締役社長 鷹野秀征さん)
- P4~5 せんだい・みやぎNPOセンターの事業から(2012年2月~2012年3月)
- P6~7 3.11震災後加入スタッフ&インターン座談会
- P8…… 新規会員・継続会員、編集後記、お知らせ、連絡先等

理事対談

「今こそ、東北発のソーシャル・ビジネスを！」

今回は、企業が主体的にソーシャル・ビジネス(以下SB)を行っていくサポートに特化した株式会社で社長を務めておられる鷹野秀征さんと、当センター代表理事の大滝、紅邑の鼎談です。これまでのSB事情や震災復興とSB、今後の可能性についてお話を伺いました。

■社会起業の変遷と2つの大震災

大滝／鷹野さんは震災後仙台に拠点を置き、企業による被災地支援の推進や被災地での雇用創出プログラムを手掛けるなど積極的に活動されていますが、これまでの経歴と取り組みをお聞かせ下さい。

鷹野／世の中をよくするために企業に影響を与えられるよう、企業コンサルタントになりました。2001年、日本初のクレジットカード決済ができるオンライン寄付サイト「ガンバNPO」(2008年に「Give One」へリニューアル)を立ち上げました。社会起業大学(註1)ではCSR(企業の社会的責任)についての講師をしています。2010年6月、ソーシャルウィンドウ株式会社を設立し、企業内からSBを生み出そうと働きかけてきました。最近になり、企業の方にも地域や社会に貢献することが自分たちのプラスにつながる事が理解されてきたと感じています。現在特に力を入れているのは、意志のある企業を被災地へ送り込み、継続して受け入れてもらえる体制を作ることです。信頼できる人がいることで地域の方が安心して受け入れられ、長期的な取り組みが可能になると思います。大滝／おっしゃる通りですね。私は「企業戦略」を教えています。早い時期から企業、NPO、行政それぞれのセクターの特徴を活かすことで新しい価値を生み出し、よりよい社会を作りたいと考えています。今回の震災では、当センターがこれまでNPOを支える仕組

みのひとつとして取り組んできた「サポート資源提供システム」(註2)がかなり活用できたと実感しました。震災復興には、各セクターやSBなどこれまでのつながりをさらに強化していくことが必要だと感じています。

紅邑／阪神・淡路大震災後に、関西では若者たちが多くのNPOやSBを立ち上げ、復興に大きな力をもたらしました。仙台でも震災後にそうした流れができてきています。その芽をつぶすことなく、志のある人を支えるために、その土地に合ったリソースの活用が必要だと思います。鷹野さんがこれまでされてきたことと、今後東北の志を持った人を支えるために必要なことには共通点が多いと感じるので、アドバイスいただけたらと思います。

鷹野／社会起業大学開校当時、半年35万円の受講料に対して高すぎると反対がありました。体験入学制度、卒業生をゲストに招くなど工夫をし、3期目は50人になりましたが集客には苦労しています。しかし受講料を下げれば人が集まるのかと言えば、そうではないと感じます。本気度合いが高く志をもった人を集めようと思えば、受講料を払ってでも、というのは必要なフィルタリングではないかと。

紅邑／働き方に対する考え方が変わってきたと思います。個人も企業も、同じ会社で働き続けるという考えはなくなっています。だからこそ、キャリアアップの場を求めています。お金を払ってでもその機会を求める人のモチベーションは、特に高いと思います。

鷹野／会社を辞めて入学する人もいて、モチベーションが高い学生同士のつながりや絆が強いのですが、課題もあります。「自分探し」に来た人が、何をやりたいのか分からぬまま時間が過ぎビジネスプラン完成までたどり着けない。ターゲットを絞り、社会起業大学はビジネスプランを作成する場として特化していけば、より高い効果が期待できると思います。

■社会起業家が育つために必要な支援

鷹野／東北のSBをとりまく全体像はいかがですか。

大滝／震災以前から、東北にはイノベーションを起こすための発想力と実行力を持ち合わせた人材が少なかったように思います。イノベーションを起こすには、既存の中小企業をリニューアルすることが一番の近道だと考えています。平成24年度からは「東北未来創造イニシアティブ」(註3)を本格始動させます。

地域で新しい事業を創るために、被災地域を支える組織が中心の6つの拠点で、事業創造メンタリング、セクターを超えた協働を展開します。大学、企業等にも同時に働きかけを行い、資金を動かしニーズをビジネスにつなげることが重要です。将来は、点として存在するSBを面的に大規模な展開することも必要になると思います。紅邑／企業は自分たちの会社のリソースや価値をあまり自覚していないように思います。社会起業家というと、企業家精神に溢れた

紅邑 晶子さん
せんたいのみやぎNPOセンター
代表理事



たかの ひでゆき
鷹野秀征さん
 ソーシャルウィンドウ株式会社
 代表取締役社長



人しかなれないというイメージを持つ人が多いと思いますが、「フラスコおおまち」(註4)に集う人を見ると、企業に属しながら自分の会社はこれでよいのかと、どこか疑問を感じているように見えます。その感じた疑問を会社が認めれば社内起業のきっかけができて、会社の成長にもつながるのではないのでしょうか。さらに社内起業家を育てるために、失敗しても立て直せる支援が必要だと思えます。

鷹野/失敗しても大丈夫と感じられる体験はとても重要ですね。失敗した経験を共有する機会を与えることで、直接的・間接的に失敗体験を積むことができます。自分の失敗体験を他人に活かすことは自己肯定体験となり、自信にもつながるようです。

■カギはマッチング

紅邑/それぞれの立場で今後SBを生み出し、育むことに対して期待されていることを伺います。

鷹野/人が居続ける仕組みを作りたいですね。ずっとそこにいる人と、時々来る人へ地域が寄せる信頼感は全く違います。被災地に入った社員と地域の人が話し合う場作りも積極的にしていきたいです。同じ会社の人々が被災地に居続けることでその土地を身近に感じ、社内で高い関心を維持できると思います。

紅邑/当センターにも、現地支援をしたい企業からの問い合わせがありますが、現地とのつながりが十分とは言えません。関心が薄れる前にもっと現地に入らなければと焦りを感じています。

大滝/現地発のSBを促進するイノベーションのために必要なことが二つあります。一つは、現地の企業、NPO、行政の横のつながりを作り切磋琢磨することです。二つ目は、現地では不足するノウハウを持っている域外との連携を取ることです。地元の農家とそれを支える消費者等の個々のつながりは既にありますが、大きな構想として実現するためには、マッチングが大切だと感じています。

鷹野/他の地域で成功した事例の何が、どこで、どのように活かせるかを組織としてマッチングできる力をつける必要があります。

紅邑/マッチングした事例を積極的にアウトプットすることも重要です。

鷹野/Iターンなども活用し、全国の英知が東北に集結しているこの機会を活かしたいですね。

紅邑/今ある資源を活かし、外部との連携を促進できるよう、今後ともよろしくお願いたします。本日はお忙しい中ありがとうございました。(記録・編集・難波未由希)

(註1) 社会起業大学: リソウル株式会社運営する社会起業家を育成することを専門とする社会人ビジネススクール。

(註2) サポート資源提供システム: 地域のNPO・NGOや市民活動団体、ボランティア団体など(以下、NPO)が必要とする様々な経営資源(物品、パソコン、資金、人材、ノウハウなど)を、企業、各種団体、市民など社会一般から集め、それをNPOに仲介・提供する仕組み。事務局をせんだいみやぎNPOセンター内に置く。

(註3) 東北未来創造イニシアティブ: 東北大学経済学研究科地域イノベーション研究センターと東北ニュービジネス協議会が中心となり、岩手、宮城、福島の被災地の現場で地域を支える団体や組織と協働しながら、人材育成、事業創造メンタリング、クロスセクターでの協働を展開する。定期的に起業の進捗状況を共有、相互触発と切磋琢磨し、セクターを横断したNPO、企業、大学、行政の支援連携を実現することを目指す。

(註4) フラスコおおまち: SB、コミュニティビジネス、事業系NPOをハード・ソフトの両面から支援する当センターの施設。大町事務局の入るビル別フロアに開設。

大滝精一さん
 せんだいみやぎNPOセンター
 代表理事



「日系アメリカ人リーダー招聘プログラム」 —震災復興から日本再生へ—

3月5日(月)、仙台国際センターを会場に、国際交流基金日米センター主催、当センターと米日カウンシル共催、「震災復興から日本再生へ:明日を拓く市民社会」シンポジウムが開催されました。県内外から70名を超える人々が集い、国の枠を超えた観点から復興や日本再生について考えました。

■日系人の歴史と米国のNPO事情を知る

プログラムは第一部プレゼンテーション「地域に生きる力〜日系アメリカ人からのメッセージ」と第二部パネルディスカッション「東北からつくる"新しい日本"〜今、私たちがともにできること」の2部構成で行われました。

第一部ゲストは、日系アメリカ人の以下の方々です。バーバラ・ヒビノ氏(オープン・ウェブ・ユー社CEO兼創業者)、マーク・ミツイ氏(ノース・シアトル・コミュニティ・カレッジ学長)、スーザン・オオヤマ氏(ケリー・ドライ・アンド・ワレン法律事務所弁護士)、ポール・ワタナベ氏(マサチューセッツ州立大学准教授)、アイリーン・ヒラノ・ノウエ氏(米日カウンシル会長)。登壇はされませんでした。他にも6名の日系ジャーナリストや大学関係者、企業経営者が同行されていました。

■東北復興再生のありようを様々な観点から考える

第一部の日系人の歴史や米国NPO事情などのプレゼンに続き、第二部では井上英之氏(慶應大学特別招聘准教授)をモデレーターに、稲葉雅子氏(株式会社ゆいネット代表取締役)、渡辺一馬氏(一般社団法人ワカツク代表理事)、そして当センター代表理事、紅邑晶子と日系人ゲストとのディスカッションです。まず日本人ゲストが各々の立場から復興〜再生へのプロセスと展望を発表。日系人ゲストがコメントをつける形で進んでいきました。

■ステージから贈られたメッセージ

いくつか会場の質問に答えた後、時間の都合で深い議論に至る前に閉会となったことが残念ではありましたが、「受け取ったモノは仕組みにして次世代に還元することが大切」「公共人材を地域社会で育成しよう」などのメッセージは、参加者の多くがうなずかれています。近い未来にそのメッセージが現実となることを確信し、また国を超え災害を共に乗り越えようとする姿勢に、人間の底力を感じた1日でした。(小川真美)

せんだいCARES2011つながる ことがまちのちカラになる

9回目を迎えたせんだいCARESは、東日本大震災の影響により例年と異なるかたちとなりました。仙台・宮城で活動するNPOを紹介するキャンペーンの代わりに、NPO、企業、行政などが出会い、つながる場として「大撮影会 & 交流会“パワーアップミーティング”」を実施しました。

■緩やかな出会いとつながり

2月4日(土)に実施したせんだいCARES「大撮影会 & 交流会“パワーアップミーティング”」には、27のNPO・NGO、企業が集まりました。東日本大震災の影響によりいつもと一味違う展開となりましたが、NPO、企業、行政によって構成される実行委員会でアイデアを出し合いユニークな企画が生まれました。

会場ではプロカメラマンの協力のもと、今年の抱負や復興へ向けての取り組みを書いたメッセージボードを各参加者に持ってもらう写真撮影。その写真を参加団体に渡し、広報をはじめいろいろな形で活用できるようにしました。また、「1ヘガルト仙台」のマスコットキャラクターヘガツ太くん、NPOいのちのこの葉プロジェクトによるラフターヨガなどが会場を盛り上げ、特におすすめ踊りは会場が一体となって踊り、笑いの絶えないイベントとなりました。

飲食を楽しみながら参加者同士が積極的な名刺交換や情報交換を行い、新たなつながりも数多く見受けられました。

■次の10年を見据えて

今回からTwitterやFacebookといったソーシャルメディアを導入し、情報発信の新たな可能性を広げたせんだいCARES。(詳しくはブログをご覧ください。http://blog.canpan.info/sendai_cares/)

来年度は10年という節目を迎えます。実行委員会でこれまでの活動や成果を振り返り、新たな目標・ビジョンを定めます。次の10年を見据え、せんだい・みやぎという被災地だからこそ、せんだいCARESならではの展開をしていきます。(桃生和成)



「仙台駆け込み寺」開設へ向けて 玄秀盛氏と地元NPO代表者との座談会開催

2月11日(土)、「一般社団法人日本駆け込み寺」(以下、駆け込み寺)の玄秀盛(げんひでもり)代表と、地元NPOの代表の方々との座談会が、ソーシャルビジネス・トレーニングジム「フラスコおおまち」を会場に開催されました。「駆け込み寺」は新宿歌舞伎町に開設されており、多重債務、自殺、引きこもり、DVの被害者など、生きにくさを抱えた人々が助けを求め飛び込んでくる場所です。今回の座談会は、近く仙台でも「駆け込み寺」を開設すべく、玄さんがヒアリングも兼ねて当センターに来所されたことを機に開催されました。

■座談会開催となるまで

出逢いは今年1月下旬。日本財団から「駆け込み寺」が仙台でも開設を考えているので、力になって欲しい」と当センターに打診がありました。駆け込み寺は、人々が抱える課題は東京だけでなくこの国全体の共通課題であるとの見解から、現在、日本各地に「駆け込み寺」を開設しようと精力的に活動されています。東日本大震災の被災地でもある東北ではその需要も大きいだろうと、まず仙台での設置を計画されたそうです。その活動は、これまで何度も新聞やテレビで報道されていますので、ご存じの方も多いかもかもしれません。

■座談会のようす

まず玄さんから駆け込み寺の紹介と現状の報告がありました。1年365日、午前10時から午後10時までオープン。ボランティアは週に2~3名が参画。今年1月の相談件数は、電話・対面を含め約200件に上るそうです。

次に、参加された(特活)仙台ダルクグループ、東北HIVコミュニケーションズ、(一社)ぶれいん・ゆに〜くす、(特活)ミヤギユースセンター、(特活)World Open Heartの方々から、自己紹介を兼ねた各々の団体活動紹介、東日本大震災前後の活動状況報告と続きました。そうした話のなか、さらに突っ込んだ意見交換や議論が交わされ、あっという間に予定されていた2時間が終了。各団体とも地域を限定しない社会課題に日々真摯に取り組まれているだけに、そのお話にはいずれも深みがあり考えさせられることばかりでした。生きにくさを抱える人々の相談窓口が、仙台で一つ増えることに期待せずにはられません。

(小川真美)

参加者同士の”きずな”が生まれた 「フラスコおおまち」 起業支援連続セミナー

2月18日(土)、仙台市市民活動サポートセンターにて、宮城大学の風見先生による起業支援連続セミナー第2回目を開催しました。第1回目は座学が中心でしたが、今回は参加者が起業プランを発表。風見先生の講評を受け、さらに全員で意見交換を行うというワークショップ形式のセミナーでした。

「批判することは簡単。どうしたら実現できるかを皆で一緒に考えることが大切」と風見先生。その言葉を心に刻み、互いのプランに“こうしたらもっと良くなるのでは”というアイデアを提供したり、“私の関係している展示会に出品しては?”など協力を申し出るケースも多数。そして先生の的確で熱意あふれる講評に感激し「2回といわず、もっと継続して受講したい」という声も多く聞かれました。

全国を飛び回り超多忙な風見先生ですが、今後も引き続き指導頂く予定です。24年度の「フラスコおおまち」にもどうぞ期待ください。(中島み子)

平成23年度みやぎNPO 夢ファンド助成事業最終報告会

3月3日、みやぎNPOプラザ交流サロンを会場に、みやぎNPO夢ファンドの助成事業最終報告会を開催しました。23年度は3つのプログラムで計8団体に総額428万円の助成を実施しており、助成を受けた各団体より助成事業で行った取り組みについて発表していただきました。団体からは、助成金の活用により地域間の支援ネットワークを構築することができたなどといった成果が報告されました。今後のさらなる活躍が期待されます。

(布田剛)

<助成先団体>

●ステップアップ支援プログラム

(特活)ほつぶの森、(特活)まなびのたねネットワーク、(特活)World Open Heart

●組織開発(人材育成を含む)支援プログラム

(特活)おひさまキッズ、(特活)せんだい杜の子ども劇場、(特活)アマニ・ヤ・アフリカ

●スタートアップ支援プログラム

(特活)フォレストサイクル元樹、食育NPO「おむすび」

「3.11震災後加入スタッフ&インターン 座談会」

震災後、当センター大町事務局とみやぎ連携復興センター(以下れんぶく)に応援に駆けつけてくれた、短期スタッフ&インターン6名による座談会を開催しました。当センターで稼働することになった理由、挑戦したいことなど、事務局次長の小川を司会に、ざっくばらんな雰囲気の中、座談会が始まりました。

■さまざまな思いを抱えて

小川:当センターに来て下さった経緯を教えてください。

中村:東北大学文学部の3年生でインターンです。私の研究室では1年間フィールドワーク実習が出来るのですが、出身が大船渡市ということもあり、震災と行政を絡めた仕事のできる団体を探していました。仙台市の方に尋ねたところ、こちらを紹介されたのがきっかけです。

藤田:NPO法人ETICの“右腕プロジェクト”(註1。以下、右腕)を見て応募しました。

中川:昨年、41年勤めた会社を定年退職し何かしたいと思っていた時に震災が起こりました。そこで40年来の付き合いのビッグイシュー基金(註2)代表の佐野章二さんに相談したところ、宮城で紅邑さん(当センター代表理事)という人が走り回っているから手伝ってほしいと言われ、こちらにやって参りました。

登坂:大学時代、当センターでインターンをしていました。現在はJICAに勤務しています。震災後JICA東北支部の応援に来た際、当センターが中間支援組織として地元の担い手になっていることを感じました。震災があったこともあり、今年の3月末までの出向という形で当センターに来ました。

佐藤:東京の総合商社に勤めていましたが、いつか地元宮城のために働きたいと思っていました。震災後、当センター理事の渡辺一馬さんにお会いする機会があり「復興に関してやることはいっぱいある。一緒にやろう」と言われ、宮城に戻ることを決めました。その後、右腕のイベントでれんぶく事務局次長の真壁さんにお会いし、自分のしてきたことが活かそうだと感じ、ここに来ました。

宮本:4年間東京で市場調査の仕事をしていました。3年ほど働いた頃から、営利目的でないことにそのスキルを活かしたいと思っていました。右腕のイベントで伊藤事務局長とお話したところ、調査出来る人を募集しているということでした。自分がやりたいことにこれまでの経験を活かせると感じ、当センターに来ました。

小川:それぞれ興味深いバックグラウンドをお持ちで頼もしいですね。それでは、実際に今の職場で働いてみて感じたことを伺いたいです。

■当センターの印象は？

中村:ここに来るまで普通に学生生活を送っていたので、何をしたらいいのか分からなかったけれど、スタッフの皆さんが私にも

分かるように仕事を教えてくれました。

宮本:ずっと営利企業に勤めていたのでカルチャーギャップがありました。たとえば紙文化。一見非効率に思えるけれど、チラシにしたり郵送したりすることは、実は相手に合わせた方法であることに気付きました。

佐藤:「非営利」という言葉の印象で、大人しい人が静かに働いているイメージでしたが、実際は社会の課題に目を向け、積極的に働いている人がたくさんいました。私も色々な情報をキャッチしていきたくです。

登坂:10年前のインターンの時は、故加藤代表理事が精力的に働いていた時期でした。今回自分が来た時に亡くなったことが非常に残念です。先駆者であった人を失った今、どこに軸足を置いて何をしていくかを考えていかなければならないと感じています。

中川:NPOはもっと自分たちのしていることをアピールしていいと思います。NPOが世の中の課題を全て解決することは難しいと思いますが、NPOにしか出来ないことがあるはず。自分に来ることをすることが、社会を変えていくことに繋がっていくのではないかと感じています。

藤田:れんぶくは何もないところからのスタートでした。全てのことを一から創り上げているので、センターが持っているリソースを、れんぶくでも上手く活かしていければと考えています。

■当センターへの期待とアドバイス

小川:外から眺めている時と、中に入った時ではやはり印象は違いますよね。さて、では勤務歴の短い皆さんだからこそ見える、センターへのメッセージがあればお願いします。

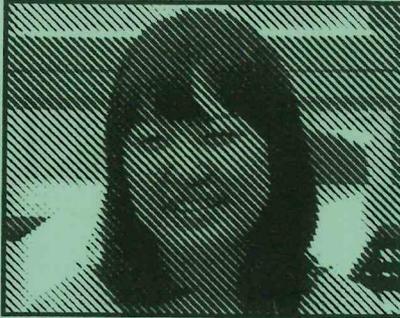
登坂:被災者に会いに行くことをベースにすることでしょうか。気仙沼・南三陸の声は2・3次情報で聞くことが多くなってしまいがちですが、それだと東京のような被災地から離れた人が得られる情報と同じになってしまいます。当センターの強みは被災地に近いことだと思うので、現場の声をキャッチしに行く姿勢・俯瞰する力が求められていると思います。

宮本:現場で活動している団体ともっと関わり、ニーズを知る機会があればいいなということです。

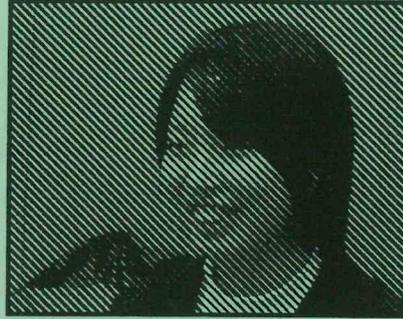
中川:昨年の暮れから名取市の支援団体に関わっていますが、やはり現場の声は違うなと感じています。現場に出ることで、事務所に戻った時の働き方も変わってくるのではないのでしょうか？

中村:現場で働いている団体の声を集めることが大切だと思います。れんぶくの事務局長、佐野さんの言葉なのですが、「れんぶくは中間支援組織だけれど、現場に行かなくてはいけない。中間支援という言葉で満足してはいけない」と。まさしくその通りだと思います。

佐藤:総務を担当しているため事務所にいることが多いのですが、現場に出ている人を含む会議に出席すると、やはり現場に出



さとう りお
佐藤 梨緒
(右腕プロジェクト)
みやぎ連携
復興センター



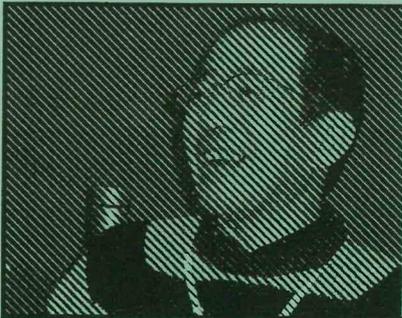
なかむら ちえみ
中村 智恵美
(東北大インターン)
みやぎ連携
復興センター



とさか そうた
登坂 宗太
(JICAより出向)
大町事務局



ふじた けん
藤田 研
(右腕プロジェクト)
みやぎ連携
復興センター



なかがわやすお
中川 康生
(ビッグイシュー
基金派遣
ボランティア)
大町事務局



みやもとゆうこ
宮本 裕子
(右腕プロジェクト)
大町事務局

ていかなくはと感します。プライベートでも行くべきだと強く思っています。

藤田:以前金融機関に勤めていた時は、現場での仕事をしていました。ただ現場ばかりになってしまうと「木を見て森を見ず」になってしまうんですね。現場に行く人と俯瞰する人両方の視点が必要だと思います。

■それぞれの「震災・復興」との関わり方

小川:当センターでの残り時間はそれぞれ違いますが、最後に、これからチャレンジしてみたいことを聞かせてください。

登坂:2つあります。1つは現在担当している支援団体の調査を終えることです。もう1つは、団体の助成金獲得の手伝いをする事です。今回当センターの助成金獲得の仕事をしたのですが、申請の仕方・ポイントの整理ができました。この経験を活かして団体の助成金獲得をサポートする仕組みを思案中です。

宮本:資料作成や企画書の書き方など、自分ができることを活かしたらと思っています。団体の方の話を聞いて、事業内容の整理

や企画書にするとということもやってみたいです。

中川:当センター・れんぶくの機関紙を作りたいです。活動したことを組織間で周知するためのものと考えています。

中村:担当していたリスト作成業務をきちんとやり遂げたいです。インターンはもうすぐ終了ですが、この経験を活かして卒論にもつなげたいと思っています。

佐藤:情報発信をしていきたいです。仙台と東京では、震災に関して温度差があると感じています。れんぶくの活動や宮城について発信することで、東京や海外にいる人たちにも少しでも震災や被災した方々のことを思い出してもらえればと思います。

藤田:れんぶくは脇役で、主役は被災者です。被災者を支えられるよう、陰ながらしっかりと活動していきたいですね。「記録・編集(阿部 明日香)」

(註1)右腕プロジェクト…NPO法人ETIC.が行う、復興に携わるプロジェクトリーダーを支える人材を東北地方のNPOに派遣するプロジェクト

(註2)ビッグイシュー基金…ホームレスの自立支援を行う非営利団体

サポート・ご協力 ありがとうございます

■平成23年度会員(敬称略・順不同、2012年2月1日～3月31日)
(正会員)ハリウコミュニケーションズ(株)

■企業・団体協力(50音順、敬称略)

岡元タイル(事務局スペースを社会貢献価格にて)、富士ゼロックス宮城(株)(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

ご寄附ありがとうございます

■東日本大震災救済・復興支援活動のためのご寄付(2012年3月末)

プロペラ募金への寄付総額(当センターが行う復興支援活動を応援する寄付).....215件 22,479,913円

■はばたけファンドへの寄付総額(宮城県内NPOが行う救済・復興支援活動を応援する寄付).....36件 10,112,754円

住友商事

東日本再生ユースチャレンジ・プログラム —インターンシップ奨励プログラム—

応募書類受付:5月1日(火)～5月15日(火)

主催:住友商事株式会社

企画・運営協力:(特活)市民社会創造ファンド

現地協力:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

被災地で活動しているNPO(宮城県内7団体)での、9ヶ月にわたるインターンシップ活動を応援するプログラムです。

※活動にあたり、インターンには奨励金が支援されます。

<受入れ団体>

- ・(特活)グループゆう
- ・(特活)都市デザインワークス
- ・国際交流協会ともだちin名取
- ・(特活)Switch
- ・(特活)ハーベスト
- ・(一社)ふれいん・ゆに〜くす
- ・(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

お申込み、お問い合わせは、こちらをご覧ください。

<http://www.civalfund.org/youth-challenge.htm>

連絡先

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎ NPO センター

〒980-0804 仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 4F

TEL : 022-264-1281 FAX : 022-264-1209

E-mail : minmin@minmin.org HP : <http://www.minmin.org/>

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

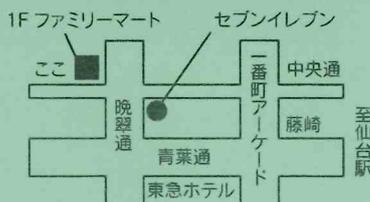
代表理事 大滝精一

紅邑晶子

編集部:小川真美

発行日:2012年5月1日

デザイン:氏家朗



岡元ビル 4F 仙台駅から徒歩 20～25分

平成24年度みやぎNPO夢ファンド 組織開発(人材育成を含む)支援 およびスタートアップ支援プログラム

公開コンペ

日時:2012年5月26日(土)

会場:みやぎNPOプラザ 交流サロン

※時間については事務局にご確認ください。

※どなたでもおいて頂けます。

※事前申込みは不要です。

| 編 | 集 | 後 | 記 |

忙しいという文字は、心を亡くすと書くわけです。この1年は、ほんとに心がどこかに行っていた感じがします。春の気配を楽しむことすら昨年は無かったのですが、今年は少しでも春を堪能したいと思います。先日、京都で会議があって、夕食を食べに行った先で、昼食でも『筍』が出てきました。春の味覚のことも忘れていたように思いました。春の山菜、春の魚、春の花。豊かな日本の四季を楽しみ味わうことを今年は取り戻したいと思います。5月5日、みそ味の柏餅をいただきます。

(代表理事 紅邑晶子)

この号がお手元に届く4月末、当センターがこの春から迎えた新職員が電話口などで皆さんにご挨拶させて頃いている頃かと思う。今回の採用は3名。全員、大町事務局勤務で、全員男性。これで大町の男女率はほぼ半々となった。年齢層も20代から各世代とりそろ。昨年はそれどころではなかったお花見や飲み会で、そんなダイバーシティな面々の話を聞けるのが楽しんだ。(OGAWA)